

発表者氏名：	阪本 真樹子	
所属学校種：	都立北特別支援学校	
派遣職種：	養護	
派遣国：	ケニア	
派遣先：	セントピーターズロック校	
キーワード：	特別支援教育	
<b>発表要旨：</b>		
<p>ケニアの教育制度は初等教育の無償化が根付き始め、中等教育の無償化も始まったところである。障がい児教育については部分的な取り組みがあるが、その理解と対応は障がい種別によって大きく異なる。また社会全体では、特に知的ハンディキャップを併せもつ障がい児者は家族の中で隠すべき存在として家に閉じ込めたままになっているケースがまだ多い現状がある。私の配属先は地方都市モンバサの小さな私立学校であり、特別支援学級において3代目 JOCV、最初の‘養護’職種として活動した。</p>		
<p>1. 今、ここで受けいられる個別の支援を探して</p> <p>文化・経済状況の違い、言葉の壁、外国人としての立場に戸惑うことも多かったが、「個の段階に応じた学習の促進」という視点を拠り所に活動を進めた。ただ常に念頭に置いたのは、今この状況の中で特に必要とされていることは何か、セントピーターズの同僚とどう共有していくかという点である。ケニアにあった形を模索しながら、発達段階別グループ学習機会の確保、ADL（日常生活の指導）の観点の共有、視覚刺激・サインの一部利用、スケジュールの提示などに取り組んだ。</p> <p>活動の終盤には、特別支援学級の担任の一人として受け入れられ、子どもたちの変化を教職員と分かち合えたと感じられたこともあった。一方、もっとよい方法やできることがあったのかもしれない、今後も続けてもらうのは難しいだろうと思うことも少なくなかった。それでも、クラスの子もたちが見せてくれた笑顔と反応を思い出すと、今も私は温かい気持ちになる。</p>		
<p>2. 未来につながる願いをこめて</p> <p>個人活動の限界を感じることも多かったが、ケニア社会また日本社会へハンディキャップをもつ子どもたちの実際の姿を伝えることが小さな次の一歩につながると考えるようになった。職業訓練（当校ではビーズワーク）のグッズ販売では、積極的に子どもたちの学校生活を紹介したり実際に関わり合う機会を作ったりした。</p>		